HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	オホーツクの人々の身体文化に関する研究 ： 自然との共生関係の歴史
Author(s)	山村, 洋子
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第16808号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16808
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99653
Type	doctoral thesis
File Information	YAMAMURA_Yoko_review.pdf, 審査の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）　　氏名：山村　洋子

主　査　教　　授　池田 恵子
審査委員　副　査　准 教 授　崎田 嘉寛
副　査　教　　授　大沼 義彦（日本女子大学）
副　査　名誉教授　浅川 和幸

学位論文題名

オホーツクの人々の身体文化に関する研究

―自然との共生関係の歴史―

本論文はオホーツクに生きる人々の身体文化を自然との共生関係の歴史を通じて明らかにすることを目的とし、身体民主主義の可能性に関する新たな身体文化論の構築を志すものであった。とりわけ、オホーツクの人々にとっての身体民主主義の実現に向けた将来的ビジョンは、自然由来の身体を介した文化によって実現可能な側面に展望があると主張されている。そのような主張の根拠として、voluntary simplicity 自発的簡素性の理論―自然環境に近い生活様式の中での身体文化、野外活動を通して、人は創造的になり、活性化し、欠乏状態は「自発的・創造的活動の機会」へと肯定的に転換される―を引いている。同時に、登山とカーリングの二例に着目し、自然由来の身体文化の大衆化と競技スポーツ化によって直面する争点も炙りだしている。

まず、第 1 章ではキース・トマスの『人間と自然界』、ジェイムズ・ターナーの言う自然守護論と自然保護論をオホーツク地域の実情に即して捉え、加えて、ヘニング・アイヒベルクの言う身体民主主義、身体文化の三元論の視角をオホーツクの身体文化の土壌に照らし、次章以降で論じる自然由来の身体文化を結章で接合するための理論的枠組みを提示している。続く章では、斜里山岳会の会報『知床』を分析し、斜里の人々と山、登山との関係への

着眼から、会報『知床』は単なる山行記録ではなく、「郷土風景」の概念に能動的に関与した登山文化の表象であったことを明らかにしている。また、第3章では、日本山岳会北海道支部と北海道山岳連盟という二つの異なる地方組織の形成過程が自然保護の理念とどのように関わったのか、日本山岳会、日本山岳協会、日本山岳会北海道支部と道岳連発行の記念誌、北海道体育協会史、日本山岳会発行の機関誌を分析し、自然の管理・利活用を前提とした近代的な自然保護の理念と手つかずの自然を維持しようとする自然守護の二つの極を巡る対立を描いている。これにより、自然との共生や文芸をも含み持つ旧来的な登山文化の継承にこだわる伝統が、なぜ、知床や斜里に長らく存在したのか根拠づけられている。同様の論点は、第4章において、オホーツクのカーリングを通して、時間軸を通した変化からも例証され、野外活動として主体的、自発的創造性が育まれた古い時代と常呂町・北見市の市町合併以後のカーリングの国際化の時代とを区別し、「竹ぼうき」時代と表現された時期に形成された地域アイデンティティの基盤が高度な競技スポーツとなって以後も、以後のカーリングの根底を支え続けたことを地元の広報誌、『広報ところ』、『広報ところ通信』、『広報きたみ』におけるカーリングの記述分析から証拠づけている。結章では、近代の自然との共生関係の歴史が人間中心主義的な自然保護理念に基づいてきたとするトマスの歴史的観点、ターナーによる自然守護論と自然保護論の争点、アイヒベルクの説く身体民主主義―民主主義は人間の中の身体的な出会いに根源があり、ローカル・アイデンティティの表象に身体文化が能動的に関与する―や「身体文化の三元論」―業績重視のエリートスポーツ実践か平等なる福祉的フィットネスかといった二元論を草の根の実践と身体的官能性が脱構築する―といった第 1 章で整理された学術的観点をオホーツクにおける自然由来の身体文化の例に照らして括り、理論的に結合させている。

審査の過程では史料実証主義的な読み解き、異なる身体文化を歴史的な理論を踏まえて統合した点が評価された。但し、難解な理論的枠組みとの関係性を有機的に結びつける上での手法、各章のまとめと全体を統括する効果的な理論誘導に向けて、助言がなされた。また、「人々」の表象言語に工夫が望まれ（「オホーツクに生きる人々＝folk」など）、地域コミュニティの将来に向けたシナリオのプロローグの役割―環境保全・自然との共生関係の再構築、人口流出問題、オホーツクに暮らす人々の生きがいの創出という今日的課題を自然由来の身体文化がどうポジティブに転換できるのかという提言―に期待が寄せられた。著者はそうした研究史における新たな視点の重要性や課題に可能な範囲で応答したが、実証研究を通じた学術による方法論の限界も伴うため、謙虚な結論を示すにとどまっている。しかし、審査委員会は、高度に発達した近代社会の流儀をこれ以上後追いすることがオホーツクに生きる人々に真の豊かさをもたらすのかという問い、本研究で論じた事例は少なくとも新たなビジョンに貢献する余地がある時代を迎えていること、カーリングに象徴されるように、人々の素朴な自然由来の遊戯にウェルネスの展望が託されていると添えられた本論文の結論を評価した。

よって著者を北海道大学 博士（教育学）の学位を授与される資格があるものと認める。